

初代世話人代表・玉岡憲明さん(93)と
聖護院僧侶。再会を喜ぶ



③修復された役行者尊像。平
成2年に聖護院から譲り受け
たもの

奥駈修験の道

「山彦ぐるーぷ」同行記

奈良県吉野郡下北山村

「明治5年の修験道禁止令は、熊野三山を震撼させた」。『熊野誌』第六十三号—明治維新前後の熊野信仰(山崎泰)一に書かれていた。「大峰修験道は吉野で始まり太古の辻で終わり前鬼に降りるようになった。それより南の熊野へは修業にこなくなったのである」。

こうして荒れ果てた修験道・南奥駈道の路面を再生し、山小屋の管理を行ってきたのがボランティア団体「新宮山彦ぐるーぷ」(1974年発足)だ。新宮市の児嶋道夫さん(73)の紹

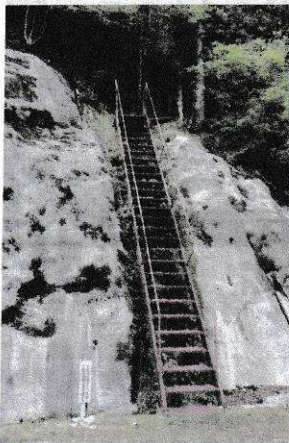
介で、「修験の道」へ同行させてもらった。行き先は奈良県下北山村の行仙宿。

①登山口から先は、勾配がきつくて会話もできなかった。②児嶋さんと、友人の加古坂昌彦さん(76)が、ペースを合わせてくれたので、どうにか到着。大半が70代という同ぐるーぷの皆さんに疲れた様子はなく、朗らかな笑顔に囲まれた。40年近く道の整備や水の補給、トイレ掃除などを続けてきた人たちだ。5月半ばすぎの標高1000^mは寒かった。

1月には、小屋の水が完全に凍るといふ。猛暑や極寒の作業を思うと頭が下がる。

この日は、山小屋のお堂にある③「役行者尊像」の修復開眼供養祭があった。本山修験宗総本山・聖護院問跡の宮城泰年門主が京都から来て直々に供養し、50人以上が集まった。修験道の開祖といわれ、空を飛ぶなど伝説も多い役行者。この行者像の中から天下泰平、国土安全を願う古い願文書が見つかり、④驚いた川島功代表は、すぐに聖護院に届けたという。

文書の内容から、宮城門主は「禁止令による苦難の頃、修験道の廃止が明らかになったことから、客仏として聖護院に託したものだと思われる。行者像はたくさんあるが、中から文書が出たのは初めて」と話して



①登山口。「傾斜は神倉山ほどではない」と励まされた



新宮市の株式会社カマハラテック寄贈のモノレール。途中まで、水などが運べるようになった



②登山口近くの水場に立つ児嶋道夫さん。ここから山小屋まで約1時間



⑤通信道が奥に続く



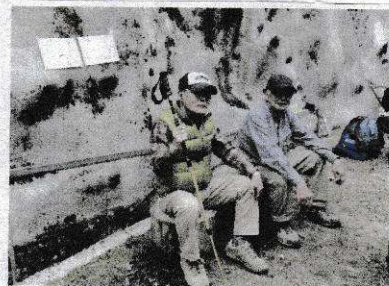
行者像の前で護摩だき



帰路に就く聖護院一行と。カリフォルニア大学で、修験道を研究中のカーリーナ・ロスさんも参加した



④川島功世話人代表(左)と沖崎吉信事務局長。前日から数人が泊まり込みで準備をした



供養祭終了後、登山口で。初期の頃から会を支え続ける玉岡さんと山上皓一郎さん

いた(同文書は聖護院資料室保管)。

行仙宿のあたりに⑤昔の郵便道路「遁信道(ていしんどう)」が残っている。見嶋さんによると、十津川と下北山村の浦向を結ぶ道で、大変な難路だという。「郵便を一日でも早く届けようと、真夜中にこの道を通って運んだらしい。昔の人はすごい」。

過酷な任務が原因で精神に異常を来す人が現れ、深夜の運搬は取りやめになったという。山の達人も「現在では考えられない」という昔の人の脚力と胆力。使命感から培われたものだろうか。道なき道を見て驚き、言葉にならなかった。

(泉 真子)

